

# 社会の階級性について

—— 学生諸君へ ——

阿 部 矢 二

一 不合理の上にたつ社会

二 自由なる労働者の資本への隷属

三 不合理のあらわれ——生産・科学の部面——

## 一 不合理の上にたつ社会

資本主義社会存立の基礎は、ブルジョアジーによるプロレタリアートの剰余労働の搾取にある。凡そ剰余労働の搾取を可能ならしめる一般的条件は、勤労者の搾取者に対する「隷属」であるが、勤労階級の隷属を維持できるものはただ「力」だけである。力が直接的生産者を隷属関係につなぎとめる。だから、いずれの階級社会でも搾取階級は同時に権力を握る政治上の支配階級である。従って階級社会の国家は、被搾取階級の反抗を鎮圧し隷従させるための、搾取階級のための強力な組織・機関である。国家は何よりも先ず人民から隔絶した強力な機関として特徴づけられ、強力な機関としての機能を失うにつれて、国家は国家たることをやめる。

「国家は諸階級の対立を制御する必要から生じたものであるから、しかしそれは同時にこれらの階級の衝突の

ただなかに生じたものであるから、それは、もつとも勢力のある、経済的に支配する階級の国家であるのがふつうである。この階級は、国家をつかつて、政治的にも支配する階級となり、こうして被圧階級を抑圧し搾取するためのあたらしい手段を手におさめる。

こうして古代国家は、なによりもまず、奴隷を抑圧するための奴隷所有者の国家であり、封建国家は、農奴および隷屬農民を抑圧するための貴族の機関であり、近代の代議制国家は、資本によって賃労働を搾取するための道具である<sup>①</sup>。」

人間による人間の搾取に基礎をおく階級社会では、何故強力の機関・国家が必要なのかというに、強力の強圧によらなければ他人の労働をタグで収取することは出来ないからである。

勤労者の労働を勤勞しないものが無償で取り上げるといふ事実——剰余労働の搾取——そのものうちに含まれている不合理性は、如何なる方法によっても被搾取者に納得させることのできないものである。社会的生産の担当者はついに納得できない関係のもとで生産している、という事情、それが階級社会のあらゆる矛盾の根源なのである。不合理なものを相手に押しつけるには力以外の方法はない、力の威圧のもとでだけ無理が「御尤」として押し通される。力には理窟はない、理窟につまった場合、強引に理窟を押しつけて我意を通す手段が力である。お互の話しあいでも、納得ずくて、ものごとをはこんでいくみちが無い場合、誰にでも尤だと認められる客観的な道理が無い場合、暴力がでてくる。問答無用腕で解決しようというのである。

社会の存続のための、人間生活再生産のための労働＝生産が、階級社会では強制と屈従、支配と被支配の関係のもとでおこなわれている。このような生産関係は、直接的生産者・社会の大衆・人民にとっては直接不利益で

あり、不合理であり、圧迫であり、全体として不満にみちたものと感じられるのがあたりまいであろう。それゆえ、五、六千年來の人類の文化史は、働く人民の側から試みられたこのような社会的不合理の是正をめざす闘争の歴史として、階級闘争の歴史として、人民の力によって押し進められてきた。働く人民は社会のうちの不合理を是正することによってのみ、自己の労働の生産力を発展させることができる。社会の生産は、社会が直接的生産者の自由の範囲を拡大し、彼等に人間たるにふさわしい生活を保証する程度にしたがって発展する。働くものの自由の伸暢・解放と社会の生産が必然に、不可分に結びつく点に、働くものの階級のもつ進歩性と創造性が認められるのである。

人類の歴史は進歩の方向へのみむかって進むという事実と法則は、歴史を押しすすめるものが社会の生産の担当者であり、彼等は生産力を高めることにより、自己を解放し、社会の不合性を排除するという事実の論理から肯定され確立されるのである。

「註」(1) マルクス・エンゲルス選集・第一三卷・下・四七六頁

## 二 自由なる労働者の資本への隷属

資本主義社会も階級社会だから、労働者階級は資本に隷属し、資本家階級によって剰余価値を搾取される、資本に対する労働者階級の隷属は、生活・生産手段の資本家階級による排他的独占——生活・生産手段の所有から労働者階級の除外——によって完全に維持される。

労働者階級の所有する唯一の商品——労働力——は、たとえその価値どおりに売買されることがあるにしても、

労働者に一日の労働による体力の消耗を補う以上のものを得させることはない。労働者階級の生活は、手から口への生活であるうえに、絶えず失業の脅威のもとにおかれている。凡ての商品は必ず売れることを保証されているのではない、だから労働力という商品も買手を見出し得ない場合——失業——がつねにおこり得る。資本主義は、その社会機構を通じて労働者階級に失業・餓死の脅威を与えることによって、この階級の資本に対する絶体の隷属をかちとる。

「飢餓は、平和で静かで絶えまない圧迫であるばかりでなく、勤勉および労働の最も自然的な動機として、力いっばいの努力を生ぜしめる。」<sup>①</sup>

餓死か賃労働か、その二者択一の自由を完全に個人の意思にまかせておいても、確実に労働を強制し、プロレタリアートをブルジョアジーに隷属させることを保証する社会体制、それが資本主義なのである。なお、プロレタリアートは餓死については、何時でもそれを払ふ自由を許されているが、労働すること——労働力を売ること——については、労働者の自由意思よりも、むしろ労働者個人の意思からは全く、自由な資本家の自由意思が優先する。けだし、労働力の購買は、その他の商品の場合とひとしく、購買者の全く自由なる意思にゆだねらるべきであるからである。労働者はその意思に反して労働を強制されることは全くありえない、この社会には、そんな強制を少しも必要としないほど沢山の失業者がいつもあふれているから、その意味では労働は完全に自由だ。一方、労働者は自己の商品・労働力を何人にも押売りすることはできない。この面では、自由は全く買手・資本家の側のものとなる。大衆的失業者の恒常的存在を基盤として、その上で労働力の売買が自由に行われるのだから、強制されない・自由なる・労働の恩寵は誰に対してのものか、言うまでもない。自由が労働者を赤貧へ、資

本家を暴富へかりたてる。階級社会での自由が支配階級によって、人民を隷属させたための強制に転化させられるということは、全くそうあるべき自然のことである。

資本の蓄積過程は、同時に産業予備軍の増大を伴って進行する。資本は剰余労働を収取して自己を拡大しつつ、併せて収取の対象となるプロレタリアートのうちに産業予備軍を増加させる。

「剰余労働者人口なるものが蓄積の——または資本制の基礎としての富の発展の——必然的産物だとすれば、この過剰人口は逆に、資本制的蓄積の楯杆となる、いな資本制的生産様式の一実存条件となる。それは、あたかも資本が自己の費用で飼育したかのように全く絶對的に資本に属するところの、自由に処分しうる産業予備軍を形成する。」<sup>②</sup>

資本の蓄積が必然に相對的過剰人口をうみ出すことになるような資本制的生産様式、「労働者人口の一部分の、失業者または半失業者へのたえざる転化」から生ずる「近代的産業の全運動形態」のもとでは、労働者階級は社会的労働の生産性の進展につれて他人のためにはいよいよ増大する富をつくり出しつつ、自らの生存条件をそれだけ覚束くし、自己の階級の資本への隷属関係をいよいよよかたくするのである。

〔註〕(1) 長谷部文雄訳青木文庫版「資本論」(4) 九九九頁

(2) 同書九八〇頁

### 三 不合理のあらわれ——生産・科学の部面——

凡そ勤労者の労働の搾取に立脚する階級社会の矛盾は、勤労者の赤貧と勤勞せざるものの巨富、二者の間の貧

富の懸絶となって、最もいちじるしく現れる。そして、この富を勤勞しない階級に私有財産として確保することが、言いかえると、勤勞者階級を所有から分離すること——彼等を貧しいままに維持すること——が、勤勞しない階級の支配と致富を可能にし、維持する根本条件である。この条件は私有財産の發生以来、それによって対立階級に分裂したすべての社会に共通して保有されている。

生活・生産手段のみではなく、あらゆる財貨が直接的生産者の労働を搾取する具として、個人的な致富の欲望充足の具として、勤勞しないもの手に独占され蓄積される。私的な富の蓄積に対する慾念が「文明の推進的精神」となった。

「いやしい所有欲こそ、文明の最初の日から今日にいたるまで、その推進的精神であった。一にも富、二にも富、そして三にも富、しかも、社会の富ではなくして、はなればなれのみずばらしい個々人の富、それが文明の唯一決定的な目標であった。」<sup>①</sup>

資本は自己増殖以外に、その存在の方法を知らない。 $G-W-G$ 、がその存在・運動の方式であり、 $G$ と $G'$ の差額 $m$ を $G$ に附加することによって、資本は自己増殖をとげる。資本のあげる剰余価値は生産の拡大、生産力の発展に伴って増大し、生産力の発展はより多くの剰余価値を生み出し、従って資本の蓄積を一層促進する。資本の蓄積と生産力とは、このような相関関係において循環し、累加される。

他面において労働の生産性の増進は、資本の有機的構成を変化させ、それを高度化する。すなわち総資本が増大するにつれて、そのうちで可変資本部分の占める割合は、不変資本部分のそれに対して相対的に減少する。可変資本部分・労働力の購入に宛てる資本部分の相対的減少は、社会の総生産物に対する労働者階級の取得分の相

対的減少にほかならない。労働者階級は労働の社会的生産力を發展させつつ自己を過剰ならしめ、自己の階級を貧窮化する。資本が資本家の私有財産であり、社会的生産が資本家の私的利得を推進的動機として行われる社会では、社会發展の総結果としての社会的労働の生産性の向上が、資本の生産性の向上として現れ、資本の生産性向上の結果は、社会的富の増加としてではなく資本家の私的財産の増加として現れる。

生産力の發展は直接の生産担当者を窮乏化し、彼等を生産の任務から解除し無用化するが、一方では働かないものをいよいよ富裕にし、富の支配を一層たしかにし、強化する。社会的生産物の私的所有——生産の社会的性格と占有の私的性格——のうちに含まれる矛盾は、生産様式のうちに敵対性を導入し、社会的富の増加と勤労大衆の窮乏化とを不可分の因果關係に結びつける。社会における貧富の懸隔は、生産様式のうちに存する矛盾・敵対性の一顯現である。

「一方の極での富の蓄積は、その対極では、すなわち、自分自身の生産物を資本として生産する階級の側では、同時に、貧困・労働苦、奴隸状態・無知・野生化および道德的墮落・の蓄積である。」<sup>②</sup>

生産様式のうちにこのような矛盾を孕んでいる社会では、一切の生産——労働は資本のために剰余価値をつくり出し、資本の蓄積に奉仕するというただ一つの目的に捧げられる手段となる。労働は、従って労働者は、資本にとっては不払労働およびその提供者としてのみ価値を認められるに過ぎない。労働者は人格としてよりも先ず「働き手」「人手」である。社会の生産が直接的生産者・人民の福祉のためではなく、資本のために剰余価値をつくり出すために行われる自然の結果として、この社会では資本——金銭——物が主人となって生きた人間がそれを拜み、それに使われ、それに奉仕するというような主客顛倒があらゆる現象のうちに見られる。

労働手段・道具は、数万年にわたる人類の労働の経験と知能を凝結した産物であり、労働の生産性のそれぞれ水準もまた労働手段の発達に照応して獲られた歴史的・社会的功績である。機械をつくり上げた近代科学が人類の共同の結集された努力の賜物であり、人類の共有財産であることはいうまでもない。

ところが、資本主義社会ではこれらの機械や科学は、他の一切の文化産物とひとしく、資本のためには剰余価値を、勤労人民のためには窮乏・困苦・蒙昧を生み出すような方法によるほか用いられない。資本は人類の社会的共同財たるべきものを個人的所有によって独占し、その利用を福祉目的から私慾充足の目的へ変転させる。例えば、機械の資本制的使用について見るに、その結果は総括的に労働者に労働者たることの不幸を痛感させるといふことにつきる。——機械は工場を「緩和された牢獄」に組織し、また、労働者の手から生活手段を打ち落とし、「労働者をうち滅ぼす。」と表現される如くである。

機械が資本によって使用される場合は、その当然の結果として利害の逆転・生産過程のうちの敵対が起る。「労働者が労働条件を使用するものではなくて、逆に労働条件が労働者を使用する。労働手段は、労働者に対しては資本として、生きた労働力を支配し吸収する死んだ労働として、対応する。」<sup>③</sup>

労働時間短縮のための最も強力な手段であり得る機械は、剰余価値を吸い取る道具として用いられると「労働者およびその家族の全生活時間を資本増殖のために処分され、労働時間に転化するための最も確実な手段に急変する。」<sup>④</sup>

労働者から筋力作業を取除いた機械は、成年男子労働者を工場から遊離し、年少者婦人を工場に吸収し、低賃銀と過度労働によってその肉体と精神とを消磨する。

「機械の資本制的充用から不可分離な矛盾や敵対なるものは実存しない、けだしそれらは機械そのものから生ずるものでなく、機械の資本制的充用から生ずるのだから！つまり、それ自体として見た機械は労働時間を短縮するが、それが資本制的に充用されると労働日を延長するのであり、それ自体としては労働を軽減するが、資本制的に充用されると労働の強度を高めるのであり、それ自体としては自然力に対する人間の勝利であるが、資本制的に充用されると人間を自然力によって抑圧するのであり、それ自体としては生産者の富を増加させるが、資本制的に充用されると生産者を窮民化させる。」<sup>⑤</sup>

機械ばかりではない、教育のような頭脳を加工する仕事もまた、この社会では、資本に奉仕して資本のために価値を捧げるものでなければならなくさせられる。

「学校教師は、児童の頭脳を加工するばかりでなく企業家の致富のために自ら苦役する場合に、生産的労働者である。」<sup>⑥</sup>

教育に関連して、この社会における学問のことに触れよう。

科学研究の目的は、誰でもいうように、真理の究明にあるとされている。ところが、真理そのものをどう考えるかについて問題がある。真理は一つだといっても、永久不変の絶対的真理なるものは存在しない。歴史とともに、人類社会の進歩とともに学問も真理も進んできたし、現に進みつつある。学問の進歩が社会の進歩に歩調を合わせるといふことは、学問は歴史の進む方向にむかってだけ発展するものだということを意味し、また、ほんとうに役立つ学問とは、歴史の進む方向を予見し、その運行を促進するものであるといふ。社会の歴史は社会の生産力の発展に押されて、生産の直接的担当者・人民を解放し、人民の福祉を増進する方向——進歩の方

向——へむかつてのみ進展する、この歴史の運動法則に合致した学問、つまり、勤労人民を解放しその福利をすすめるに役立つ学問が、生きて伸びるほんとうの科学である。

この見方に立つと科学の進歩性は、すなわちその階級的進歩性のうちに見出される。社会の進歩はつねに生産の担当者階級の側によって促進されるといふ事実によって、科学もまたその真偽がテストされる。科学は、歴史を押し進める階級の利益を代表するという意味で階級的である場合にのみ進歩する、従って真理に一層近いものとなりうる。

反対に歴史の法則に叛き、進歩に抗して現状を維持することに利益をつなぐ階級、さらにすすんで歴史の歯車を逆転させようとなさえ試みる反動化した階級の立場にたつ学問は、その階級性のゆえに真実を嘘偽に、嘘偽を真実に錯倒せざるをえないような矛盾に陥入り、科学の本質を失い、その利益を代表する階級とともに、歴史によって必滅を運命づけられる。階級に分裂し、利害が相反して現れる社会では、労働の労苦を軽減する筈の機械が「労働者を滅ぼす」機械に逆転するように、学問、思想もまた反動化した支配階級の手におちいり、反動的支配を維持するために使われると、蒙を啓き、叡知と徳性を磨き、真実を知らしめることによって人民の福祉を加えるごときその本来の使命に叛き、真実を蔽い嘘偽を暴かず、知性を曇らせ悖徳を援護し、人民を無知無抵抗にしてその貧乏と不運とを諦めさせるための即ち階級的支配のための有力な手段に変質し転化する。かかる学問の墮落はもともと「社会（もちろん非労働者から成立つ社会）を幸福にし、人民そのものをみじめな状態で満足させるためには、大多数者が何時までも無知であり貧乏であることを要する。」<sup>①</sup>というような階級社会の依って立つ土台のうちに存する根本的不合理性より必然に生じるのである。

このように反動化し、墮落した学問に対する批判は、人間による人間の搾取を根絶し、諸階級を窮局的に廃絶することをその歴史的使命とする勤労者階級の立場に立ち、その利益を代表するものにとってのみ可能である。社会科学は階級闘争の思想的武器として、人民解放の役割を果すものであるかぎりにおいて科学たりうるのである。「資本論」が科学的価値をもちつづけているのは、その著者がプロレタリアートの立場に立って徹底的に忠実にその利益を代表したからのことである。

マルクスは「現存するものの肯定的理解のうち、同時にまた、その否定の・その必然的な崩壊の・理解をも含み、どの生成せる形態をも運動の流れにおいて・したがってまたその無常的な側面から・理解し、何ものによっても畏服せしめられず、その本質上、批判的かつ革命的である」ところの弁証法の方法によって彼の学統をうちたてた。この方法によって彼は、資本主義社会を分析し、この社会の「経済的運動法則」を発見した。彼の研究が、ブルジョアの利害関係や「警察の忌諱にふるか否か」の考慮から全く自由であり、したがって「何ものによっても畏服」せしめられないところの科学的方法によってなすとげられたのに対し、ブルジョア側の学問はどうであろう。資本主義の矛盾が敵対としていちじるしく現れ始めて以来、その科学性はあやしくなり、ブルジョアの・金銭的・関係の狭いわく内で「慾得づくの論難攻撃」に終始している状態である。

「ブルジョアジーは、イギリスおよびフランスではすでに政治的権力を奪取した。そのとき以来、階級闘争が、実践的および理論的に、ますます公然かつ威嚇的な諸形態をとった。それは科学的ブルジョア経済学の葬鐘を鳴らした。いまや問題なのは、もはや、この定理が正しいかあの定理が正しいかということではなくて、それが資本にとって有益か有害か、好都合か不都合かということ、警察の忌諱にふれるか否かということであった。私心

のない研究の代りに欲得づくの論難攻撃が現われ、とらわれない科学的研究の代りに心やましく意図あしき論弁が現われた。」<sup>⑨</sup><sup>⑩</sup>

既得の特権や利益を失わないように、社会の現状を維持することに第一の関心をもち、そのために全勢力をつくして矛盾の圧殺に努力しなければならぬような階級の側には、凡そ階級的利害をはなれた学問研究の自由なるものなどのありえないことは明かである。

キリスト教の僧侶が支配した中世ヨーロッパでは、バイブルの僧侶による教条主義的解釈が僧侶の絶対専制支配を維持するための最も有力な・最も都合のいい手段であった。それで、バイブルの教条主義的解釈が唯一の真実であり、これに反対したり矛盾する学問、思想や現実を、すべて異端、邪悪、嘘偽だというドグマを確立することによって精神界と俗界との支配が行われた。神の權威をかりたこのドグマは、一千年の久しきにわたって欧州の封建社会を支えた思想的支柱だが、天上の神の名によって最大の実利を占めたものは、地上の特権階級・僧侶・貴族であった。現実には教条は神の意思とは全くの別物をもたらした。特権階級には年貢——農民の剰余価値——と、その浪費による贅沢三昧の寄生生活とを、農民には農奴の身分と強制労働と貧苦とを。

教条信仰がもたらすものが、単なる靈魂の救いではなくて、肉体の糧・年貢であり、俗界の私慾につながる利得であるという事実、この事実があったからこそ教条に対する懷疑、批判、攻撃が異端として、支配者の此上もない憎悪と憤激を呼び起し、異端者を火あぶりにするまでにいたらしめたのである。このような階級的利益の狭い、わく内に閉じ込められ、無為、怠惰な生活に耽けることを特権と心得ている支配階級にとっては、何がほんとうであり、何がうそであるか、というような真偽のせんさくなどよりも、何が利益か、何が損かの問題の方が一

層身にせまり、遙かに重大であるに相違ない。それだから、支配階級の側での學問は、階級的利害關係に触れない限度での極く狭い研究の自由——不自由——をもつことを許されるに過ぎない。階級的利害の限界から逸脱する場合は、學問といわず総てのものが禁遏され迫害される。従つて一般に、曲學阿世が安全第一の渡世法となる。權威と富におもねることが安全な生活の方法となるのだが、これ以上の人間生活の墮落があらうか。この渡世法に従わないう墮落しないで人間の權威をたてようとして、ほんとうの事實をそのまま公表したガリレオが、キリスト教の僧さんによってどんなひどいめにあわされたかは人の知るところである。

中世的教会とガリレオの天文学との關係に似たものが、ブルジョア支配とプロレタリア経済学との關係のうちにもちこされて現存する。経済学は本来資本關係の分析を通じて、剰余價值の原因を探り、これを明かにすることをもつてその科学的使命としている。ところが、剰余價值の收取關係こそこの社会のあらゆる矛盾の根源なのだから、その点をあばき出すことは、現實の利害損得をめぐる階級的敵對を激化させずにはおかない。それだから、現に賃労働を收取することに利益をもっている階級の側に立つ経済学のなしうるところは、剰余價值そのものの否認、乃至は、剰余價值の出处をおおいかくすことによって、剰余價值搾取關係を結局否定することに限定されざるをえない。ブルジョアジーの社会主義（プロレタリア）経済学に対するありとあらゆる非難攻撃は、心にやましい私慾をもちながら、彼等が現に取得している剰余價值の擁護を目的としているものだといふにつきて、事實の隱蔽、真理の歪曲、嘘偽の捏造が學問の仕事になる。「経済学の領域では、自由な科学的研究は、他のすべての領域におけると同じ敵に出会ふばかりではない。経済学の取扱う材料の独自の本性は、人心の最も烈しく最も狭量で最も厭わしい情念を、私的利害からの忿怒を、自由な科学的研究に対する戦いに呼びだす。

たとえばイギリスの高教会は、その貨幣収入の三十九分の一にたいする攻撃よりも、むしろ、その三十九の信  
 仰箇条のうちの三十八にたいする攻撃の方を赦すのである。<sup>⑧</sup>」

信仰を守る筈の人々が金銭を守るものであったり、軍備拡張が平和の保証であって、軍備縮少が平和攻勢で  
 あったりする社会では、何が正しいか、何が正しくないか、それを判定する標準が失われてしまったようである。  
 然しながら、うそは何時かうそとして万人の前に暴露され、眞実はいくら歪曲され、蔽われても眞実として現れ  
 る、というのが人間生活の歴史的事実である。無理が通るのでなく、道理が通るのだというこの史的事実が、人  
 類社会の進歩性についての確証と確信とを人々に与える。人々はこの確信に励まされて、積極的に歴史を進歩の  
 方向へ推しすすめる努力を、よりよき、より高度の将来社会実現の努力を、するのである。進歩の側に立つもの  
 にとってのみ前途は明かるい。

「註」(1) 前出・選集第十三卷・下 四八二頁

(2) 前出・資本論(4) 九九八頁

(3) 同書 (3) 六八五頁

(4) 同書 (3) 六六二頁

(5) 同書 (3) 七一一頁

(6) 同書 (3) 八〇四頁

(7) 同書 (4) 九五六頁

(8) 同書 (1) 八六―八七頁

(9) 同書 (1) 七九頁

(10) 人間的福祉とは全く無関係に、機械が剩餘価値吸収の道具として作られ使用されるということの特徴的な一例をあげる。

「モスクワのカリブル工場の職長エヌ・ロシースキーは、次のように書いている。

「わたしは最近、パレー商会の工作機目録を読んで大憤慨をした。この工作機で作業をするときに、人間は同時に二つのハンドルと二つのペダルと一つの首輪とを使う。そうだアメリカの設計者は、二十世紀中葉製の首輪をつくりだしたのだ！ 労働者はこの首輪につながれて、胴体の運動で垂直の支柱をうごかす。こうして労働者は、一交替時間内に八百個の製品を「踊つてかせぎだす」のだ。設計者は、労働者が十分猛烈に「踊ら」ないですましてしまうかもしれないとみてとった。そして設計者は、そのような「危険」をとりのぞく方法を発見した。労働者の頭の真上に、油をおとす装置がとりつけられ、労働者が適時に必要な動きをしない場合には、頭のうえに油がそそがれるのだ。」

(ブラウダ・一九四九年十二月二十日)——「コンスタンチノフ・史的唯物論・上巻・二三三頁参照」

(11) 前出・資本論(1)

七三頁

——一九五三・四・二八——